

一八八三年八月十九日(日)

ドツキネーシヨル
南神村の寺院で信者たちと語らう聖ラーマクリシユナ

ヴェーダーンタに関する話

タクール、聖ラーマクリシユナは、ドツキネーシヨル南神村の寺院で信者たちといつしよに過つこされている。今日はスラボンつ黒分一日、キリスト暦一八八三年八月十九日、日曜日である。今しがた、昼のお供えを知らせるシヤナ笛が鳴っていた。そのため、各神殿の扉は閉（扉註）まっている。タクール、聖ラーマクリシユナはお供えのお下がりを召し上がった後、しばらく休んでいらつしやるところである。休息のあと——まだ十二時を廻つたばかりだが——タクールは、小寝台の上にお坐りになった。丁度そのとき、校長が入ってきてごあいさつ申し上げた。間もなく、ヴェーダーンタに関する話から二人の会話は始まった。

〔ヴェーダーンタ派の意見——クリシユナキシヨルのこと〕

聖ラーマクリシユナ「(校長に向かつて)ね、『アシユターヴァクラ・サンヒター』(ギーター)に真我のことが（アートマン）でている。アートマンの智識を学んでいる人たちは、ソールハム（パワートマン）つまり、私はその至上我だ（パワートマン）と言う。

これがヴェーダーンタ派の出家たちの意見だけれども、これは普通の生活をしている人たちにとって
 は正しい考えじゃないね。世間でいろんなことをして、それでも、私はその不動不変なる至上
 我だ。なんて——そんなワケがないだろう？ ヴェーダーンタ派の言うには、真我は全く無執着だそ
 うだ。不幸、罪と徳、こういうものは皆、全然、真我を傷つけたり影響を与えたりできないと言っ
 ている。そんなこと言ったって、肉体が自分だと思っっている普通の人間は、実際にこういうもので苦
 しんでいるんだ。煙は壁を汚す。しかし、虚空を汚すことはできない。クリシュナキシヨルはこういっ
 た智者たちの口まねをして、『私はカー、つまり、虚空のようなものだ』と言っている。まあ、あの
 人は最上の信仰者だからこう言ってもおかしくないが、普通の人がみんな、こんなことを言うもの
 じゃない」(訳註、アシユターヴァクラ・サンヒター——不二二元ヴェーダーンタに関する權威ある書物)

〔罪と徳、愛着か慈悲か？〕

「だが、私は自由だ」という自信は大そういいことだよ。私は自由、私は自在」といつもくり返して
 いれば、やがて本当に自由自在になれる。反対に、私は束縛されている、私は束縛されている」とい

(訳註1) 食べ物を見ることは、それを見た人が目でその食べ物を味わうことになるので、お供えの食べ物は誰にも
 見られないように扉は閉められる。運ぶ時もカバーをして運び、差し上げるときに見ないようにカバーを外して捧
 げる。神さまにとって味わうとは、見ることが味わうことになるのである。

つもくりかえし言っている人は、本当に縛られていくんだ。私は罪人です、私は罪人です、なんていつも言ってるバカは、本当にその通りになるんだよ。それどころか、こう言わなけりゃ——私はあの御方の名をとなえているんだぞ。罪だとか、束縛なんて——。

(校長に向かつて) ねえ、わたしの心は今とても塞いでいるんだよ。フリダ(原典註)イがひどい病気だという手紙が来たものだから——。この気持ちはいつたい愛着マイヤーだろうか、それとも、慈悲グヤイだろうか、お前、どっちだと思う?」

校長は、何とも返答に困って黙っているほかはなかった。

聖ラーマクリシユナ「愛着マイヤーとはどんなものか、知っているかい? 父親母親、妻子供、兄弟姉妹、甥姪といった自分の身内に対する愛情だ。それから、慈悲グヤイというのは生きとし生けるものみんなに対する愛情だ。わたしの場合はどうなんだろう? マーヤーだろうか、グヤイだろうか? だけど、フリダイはわたしによく尽くしてくれたからね——ほんとによく世話してくれた——手でわたしのお尻を拭いてくれたものだよ。まあ、しまいにはひどい仕打ちにあったもんだよ——あんまりイヤな思いをさせるものだから、わたしは堤防からガンジス河に飛び込んで自殺するところだった。だけど、よく尽くしてくれたよ。いま何か金でもやれるようだと、わたしも気が落ち着くんだが——。でも、そんなこと、どの旦那に話したらいいんだい? 誰がそんなこと、言えるかい?」

女神が宿った神像—— ヴィシユヌブルでムリンマイーを見ること

二時か三時頃、偉大なる信者^{バクタ}アダル・センとバララム・ボースが来て、大覚者^{パラマハンサ・デーヴァ}様に額^{ぬか}ずいてご挨拶申し上げ、席に着いた。彼らが、「ごきげんは如何でございますか？」と、お聞きするとタクルは、「ああ、身体^{からだ}の具合はいいが、ちよつと気にかかることができてね」とおっしゃった。

フリダイの病気に關しては、何一つお話しにならなかつた。

話題は、バラバザールのマリツク一族の家に祀られているシンハヴァーヒニー(ライオンに乗る女の意、ドウルガー女神)の話になつた。

聖ラーマクリシュナ「シンハヴァアーヒニーをわたしは見に行つたよ。チャシャドーパ・バラのマリツク一族の或る家に祀られている女神さまだ。その家はひどく荒れていて、落ちぶれていた。あちこち鳩の糞やら苔が生えてるやら、漆喰^{しつくい}がボロボロ落ちこぼれているやら——。ほかのマリツク一族は榮えているようだが、この家は繁榮^{さか}えているようには見えなかつた。(校長に)そうだお前、これはどういふことなのか説明してごらん」

校長は黙っていた。

(原典註) フリダイは西暦一八八一年の沐浴祭^{スナイヤストラ}の日まで、カーリー神殿において約二十三年の間、大覚者様の身の廻りのお世話をしていた。聖ラーマクリシュナの姉の息子で、フグリー地方にあるシホル村に生まれた。この村はタクルの生誕地カマルブクル村から四マイル(約6哩)ほど離れたところである。ベンガル暦一三〇六年(西暦一九〇〇年)のボイシャク月に、六十二才を一期として生誕地において他界した。(訳註——正確には、ベンガル暦一三〇六年ボイシャク月は西暦一八九九年にあたる)

聖ラーマクリシュナ「分かるかい？ カルマの苦楽がまだ残っていれば、誰だってそれを済すまさにやならないんだ。前生からの影響（サムスカラ）や過去世のカルマの結果（フラーフダ・カルマ）は、みんな認めなけりゃいけないよ。

（校長に）その見すばらしい家で、シンハヴァアーヒニーの顔は光り輝いていたよ。神が神像などに顕現すること（アヴィル・バーヴァ）は認めなくちゃいけないよ。

わたしは一度、ヴィシュヌプルへ行つた。その王様は立派な寺をいくつも持っているが、そこにムリンマイーという名の女神像がある。そばに大きな湖があつた。クリシュナ・バンダとラーラ・バンダだ。そうそう、湖からブーンと女の髪油の臭いするのは何故か、わかるかね？ わたしも知らなかつたんだが、女たちがムリンマイーを拜みに来て、香油を供えるんだよ。それから、その湖のそばで三昧状態になつたが、そのときはまだ寺で女神像を拜んでいなかった。そのまま三昧をつづけているうちに、ムリンマイー女神の姿が見えた——腰から上だけだつたがね」

〔信仰者の悲喜、禍福——バーガヴァタ、およびマハーバーラタの話〕

そうこうしているうちに、他の信者たちが大勢集まつてきた。カプール（現アフガニスタンの首都）の政治革命と内乱の話題が出ていた。一人がヤクブ・カーンが廃位になつたと言つた。この人は大覚者様に向かつて次のように申し上げた。——「老師マハシヤイさま、ヤクブ・カーンは大へん信心深い人なのでございませすよ」

聖ラーマクリシュナ「わかるかい？ 幸、不幸、喜び、悲しみ、これは身体をもっているかぎりついでまわるんだよ。カーヴィ・カンカンの『チャンディー』（ヒンドゥーの聖典）に出ているが、カルビールは牢屋に入れられて胸に重い石をのせられた——カルビールは神に祝福されて生まれた男の子なのに。肉体を持っているかぎり、楽しみ苦しみの経験から逃げられないんだよ。

シュリー・マンタはえらい信仰者だった。その上、母親のクツラナは大女神様バガヴァティに大そう可愛がられたものだ。そのシュリー・マンタがどんなにひどい目にあつたことか！ すんでのことに、火葬場で殺されるころだった。

大そう信心深い木こりがいて、大女神様バガヴァティにお会いすることができた。あの御方は、木こりを大そうかわいがつて、どんなにお恵みを下さつたことか。けれど、木こりの仕事はずっと続けたよ！ 木を伐つて食べていかなければならなかつた。デーヴァキー（クリシュナの母）は、四つの手に笏しやくと円盤とほら貝と蓮華を持った大女神の姿（ヴィシシュス）を見ても、牢を出ることは出来なかつたよ！」

校長「牢屋を出るだけでは如何なものでしょうか？ 肉体こそあらゆるトラブルの大本なのです。肉体から出ていくことが必要だつたのだと思います」

聖ラーマクリシュナ「わかるかい？ プラーラプタ・カルマの苦楽なんだよ。その帳尻が合わないうちは、肉体はついてまわる。ひとりの盲人めくらがガンジス河で沐浴した。罪はみんな消えた。だが、盲の目は明かなかつた（皆笑う）。過去世のカルマがあつたから、この世で盲の経験をしているのだ」

モニ「放たれた矢は、もう制御できません」

聖ラーマクリシュナ「肉体についた幸不幸はどんなに起こっても、信仰者には、ほんとうの智慧と信仰という何より心強い財産があつて、その富は永久になくならないんだよ。見ろ、パーンドウ兄弟の災難を！だが、その災難で靈性を失くしたことは、一度だつてなかつた。あの兄弟のような智者が、あの兄弟のような信仰者がどこにいる？」

三昧境——キャプテンとナレンドラ来る

そのとき、ナレンドラとヴィシユワナート・ウパッタエが来た。ヴィシユワナートはネパール国王の法律顧問で——つまり王室代理人である。タクルは彼のことをキャプテンと呼んでいらつしやる。ナレンドラは年のころ二十一、二才。文系の学生である。時々、特に日曜日にはよくここへ来て、タクルにお目にかかっている。

彼等がお辞儀をして坐ると、大覚者様はナレンドラに歌をうたつてくれるようにとおっしゃつた。部屋の西側の壁にはタンプーラ(弦楽器)が掛かつていた。皆は一様に、この歌い手の方を眺めている。バンヤとタブラ(二つで対をなす太鼓)の音色を合わせて——それから歌である。

聖ラーマクリシュナ、ナレンドラに向かつて——

「ね、そいつは前ほどよく鳴らないんだよ」

キャプテン「満ちたりて坐っているから、それで音をたてないのです。水がいっぱい詰まった瓶です」(一同笑う)

聖ラーマクリシュナ、キャプテンに向かって——「じゃあ、ナーラダたちは？」

キャプテン「あの方々は、他人の苦しみを見かねてお話しになったのです」

聖ラーマクリシュナ「そうだよ。ナーラダ、シユカ・デーヴァ、こういった方々は三昧から下りていらして——慈悲心から、他人を救ってあげるために、いろいろお話しになったのだ」

ナレンドラがうたい始めた——

クサティヤム シワナム スンダラム
真、善、美なる その姿

わが心に光り輝くは

——ああ そはいつの日か

見よ 見よ 日ごと夜ごと

美しきよるこびの 大海に沈む日は

限りなき智慧なる 主の心

胸にさし入り 貫き給えは

われ 声もなく 君のみ足に

身を投げて 救いを求めん

平安なるシヴァ 二つとなき

王の中の王なるみ足に

すべてを任せば おお 親しき友よ

この人生いのちの いかに実り多きか

この上なく力強き言葉に

この人生よは天国の樂しみ

主よ わが仰まぎまつる君は

すべての罪きよを淨めつくすもの

光に会えば 暗黒の闇

すみやかに消ゆるごとく

主よ 君 出いでまさは

無始よりの罪 ことごとく逃げ去らん

永とわ久のよろこびの 主なる月

心の大空にさし昇れば

チャコルの鳥の舞ふがごとく
わが心 つねに朗らかに樂し

チャコル——赤い脚を持つ山うずら(鳥)

おお北極星のごと 心に燃ゆる

不動の信に 神 わが願いを成じ

日に夜に ひたすら我を忘れて

聖き愛に浸らん 君を得し日は

——ああ そはいつの日か

永久とわのよろこびの——という句が出るや否や、タクール、聖ラーマクリシュナは深い三昧にお入りになった！ 東に向いて、手を合わせて坐っていらつしやる。身体はまっすぐに伸ばしていらつしやる。歓喜極まりない美の大海に潜っておられるのだ！ 人間の意識は全くないのだ。呼吸もあるのかないのか！ 不動の姿！ まばたきもない！ 絵のなかの人のように坐っていらつしやる。この場から、どこかへ行ってしまったかのように！

サッチダーナンダに達する方法——智者と信仰者の相異

三昧は解けた。それより前にナレンドラは、聖ラーマクリシュナの三昧を見て、部屋を出て東側の

ペランダに行った。そこにはハズラー先生が、毛布の上に手に数珠を持って坐っていた。ナレンドラはこの人と話をしていた。一方、部屋の中は人でいっぱいだ。聖ラーマクリシュナが三昧を解いてから信者たちを見回して、ナレンドラがいけないことに気が付かれた。タンプーラはそこに弾き手を失って放り出されてある。信者たちは皆一様に、熱心に注意深くタクールを見つめている。

聖ラーマクリシュナ「火を付けていったのはあれだ。いま、ここに居ようといまいと！ キャプテン、超越意識を我が物にしなさいよ。あんたたちだって、ほんとうの^{よろこび}歡喜が味わえる。超越意識はあるんだよ——ただ、覆いがかかっていると、心が散り乱れているだけだ。世間への執着が減るほど、心が神様の方に向くんだよ」

キャプテン「カルカッタの家の方角へ進むほど、カーシー(聖地ベナレス)から遠ざかりますし、カーシーの方角へ行くほど、家からは遠ざかります」

聖ラーマクリシュナ「^{シュリー・マテイ}聖女(ラーター)はクリシュナの方に近づくにつれて、クリシュナの体の香りをだんだん強く嗅ぐことができた。神様の近くに行くほど、信仰が強くなる。海の近くに河は行くほど、潮の満干が見えてくる。

^{ジュニヤニ}智者の心の中には、ガンジス河が一方に向かって流れている。彼にとつては、すべてが夢まぼろしだ。彼はいつも自分の本性に住している。ところが、信者の中には河はない。潮の満干^{みちひ}がある。笑ったり泣いたり、踊ったり歌ったりする。信者は、あの御方といっしょに遊ぶのが好きなんだ。泳いだり、潜ったり、ポツカリ浮かび上がったたり——ちよとど、水の中の氷みたいに、プカーリ、プカリ、

プカリー、プカリしているのさ、ハッハッハッハ」

〔サッチダーナンダ（永遠の歓喜）とサッチダーナンダ女神^{マイ}——ブラフマン（根本原理）とアディヤシャ）
〔クテイ（根元造化力）は同じもの

「智者は^{ジニヤニ}ブラフマンを知ろうと努める。信仰者は^{バクタクタ}至聖を——六つの力（富、力、名声、美、知識、捨離）
を持った全能の^{カミ}至聖を求める。だが、ほんとうは、ブラフマンと力とは同じものだ。サッチダー
ナンダ（梵—永遠絶対の实在、歡喜、智慧）がサッチダーナンダ女神^{マイ}、つまり、大実母なんだ。宝石とその
^{カガデキ}光輝のような関係だ。宝石の光といえば宝石のことを思うし、宝石といえばその光のことを思う。宝
石のことを考えないで、宝石の光のことを考えることはできない。宝石の光を考えないで、宝石のこ
とを考えることはできない。

一つのサッチダーナンダが、力と様子を別にして顕われている——だから、いろいろな形や色があるんだよ——あの大実母がすべてを引き出す！ 仕事（創造・維持・破壊）をしているところ、そこに力がある。だが、水は静かにしていても水だ。波やアワが立っていても水だ。あのサッチダーナンダが根元造化力^{シャクテイ}で、その御方が造ったり、保存したり、壊したりなさるのだ。キャプテンが何もしないでいるときも、静かに祈っているときも、おんなじ人だ。総督のとこに出向いているときもキャプテンだ。ただ、様子がちがうだけだ」

キャプテン「全くその通りです。老師^{マハィンヤィ}」

聖ラーマクリシユナ「この話は、ケーシャブ・センにも話したよ」

キャプテン「ケーシャブ・センはあまり誠実とは言えないし、自分勝手なところがありますね。あ
の人は要するに、金持ちの大旦那で、修道者^{サド}ではありません」

聖ラーマクリシユナは信者たちに向かつて――

「キャプテンはわたしを止めるんだよ――ケーシャブのところへ行くなって」

キャプテン「老師^{スレニヤ}、あなたが行くとおっしゃれば、私がどうすることもできません？」

聖ラーマクリシユナ、いささかムツとした面持ちで――

「あんたは、金のために総督に会いに行けるのに、何でわたしがケーシャブ・センのところへ行っちゃ
いけないんだ？ 彼は神様を想うし、ハリの名も称える。神、即、現象・生物世界とあんたはいつ
も言ってるだろう。神様ご自身が、こういうすべての人間や、宇宙世界になっていらっしゃるんだ
よ！」（訳註――この会話は、ヒンドゥー教徒は非ヒンドゥーとの接触を不浄と考えていたことが背景になっている）

ナレンドラと共に――智慧のヨーガと信仰のヨーガの調和

こうおっしゃって、タクールは急に部屋から出て、北東のベランダにおいでになった。キャプテン
もその他の信者達も、部屋のなかに坐つたまま、タクールが戻つてこられるのを待っていた。校長は
タクールに従いてベランダに行った。北東のベランダでは、ナレンドラがハズラーと何か話をしてい
た。タクール、聖ラーマクリシユナは、ハズラーが大そう無味乾燥な智識探求者だということを、よ

く御存知であった。彼の持論は、「世界は夢まぼろしだ。だから、やれ、祈りだの、やれ、供物だの騒ぐのは、愚劣きわまることだ。我々はただ、自己の本性に心を集中するべきである」と、「私こそ、ソレ（原理）である」

聖ラーマクリシュナ「ハ、ハ、ハ、ハ、何だい！ お前たち、何を話しているんだね？」

ナレンドラ「あはははは、いろんなことを沢山話しているんですよ。——とてつもなく、長い、高い話です」

聖ラーマクリシュナ「ハ、ハ、ハ、そうかい。だがね、純粋な智慧と純粋な信仰は一つものだよ。純粋な智慧のたどり着く同じところへ、純粋な信仰も着くんだよ。それに、信仰の道の方がずっと楽だ」
ナレンドラ「智慧分別に用はない。大実母よ、狂気クラマキにしておくれクラマキです。校長先生、ハミルトンの本を読みましたら、こんなことが書いてありましたよ。」

“A learned ignorance is the end of Philosophy and the beginning of Religion.”

聖ラーマクリシュナは校長に向かって——

「それ、どういう意味なんだい？」

ナレンドラ「フィロソフィー（哲学）を学んで最後に人間は学者バカ（学問だけよく分かって、ほかのことはさっぱり分からない人）になり、そのときはじめて宗教のことを語り出す。バカになったときに宗教の始まりである、ということですよ」

聖ラーマクリシュナ「ハッハッハッハア、（英語で）サンキュー！ サンキュー！ あはははははは」

夕拝のハリ称名、ナレンドラのすぐれた性質

夕暮迫る頃、大方の人たちは家路についた。ナレンドラも帰った。

時刻は足早に過ぎて、もう日は暮れかかっている。係りの者が灯りの用意のためあちこち動いている。カーリー殿とヴィシユヌ殿の二人の役僧がガンガーに身を浸し、身体の内と外を清めている。大急ぎで帰って神々への夕べの奉仕をすることだろう。南神村ドフネトヨルの青年たちが、手にステッキを持ったり、友だちと手をつないだりしながら、庭園を散歩しようとしてやってきている。彼等は堤防の上を歩いて、花の香りにみちた夕方のすがすがしい風を吸いながら、スラボン月(雨期)のガンジス河の速い流れと波のうねりを眺めている。彼等のなかでも思索的な傾向の者たちは、五聖樹パチャパティの杜のあたりを散歩している。至尊バガワン、聖ラーマクリシュナも西のベランダから、しばらくの間ガンジスの流れを眺めておられた。

すっかり日が暮れた。係りの者が場所場所の灯火あかりをつけ終った。大覚者様の部屋に女中が入ってきてランプをつけ樹脂香を焚いた。一方、十二のお堂でシヴァへの献灯アムラティが、そしてヴィシユヌ殿とカーリー殿で献灯アムラティが始まった。カシヨール(スティックで叩くシンバル)、ドラ、鐘かねの甘美でまた莊重な響きが聞こえてくる。甘美で莊重——なぜかといえは、寺院のすぐそばの聖なるガンジスの流れる音が混っているから。

スラボン月の黒分ついで一日、間もなく月が昇った(つまり十六夜の月)。広大な境内や中庭の灌木くさむらの叢は、

ふりそそぐ月の光を存分に浴び、バギーラテイ・ガンガー（ガンジス河）は、さも楽しげな声をたてて活き活きと流れていた。（訳註、バギーラテイ・ガンガー——ガンジス河は天上を流れる河だったが、バギーラタ王の願いで地上を流れるようになったので、こう呼ばれる）

日暮れになると、聖ラーマクリシュナは宇宙の大実母おおみははにごあいさつをなさってから、手をたたきながらハリ称名をしていらつしやる！ 部屋のなかにはたくさんおみははの神々聖者の絵がかかっている——ドルヴァやブラフラーダ（訳註）の絵、ラーマ王の絵、大実母カーリーの絵、ラーダーとクリシュナの絵、等々。タクトールはその一つ一つの前で名前を呼んでお辞儀をなさる。そして、次のようなことは唱えていらつしやる。——「ブラフマン、アートマン、バガヴァン」「バーガヴァタ、バクタ、バガヴァン」「ブラフマン・シャクテイ、シャクテイ・ブラフマン」「ヴェエダ、プラーナ、タントラ、ギーター、ガイヤトリー」「あなたこそ唯一の避難所、あなたこそ唯一の避難所」「ナハン、ナハン、トゥフ、トゥフ（私じゃない、私じゃない、あなた、あなた）」「わたしは道具、あんたが使い手」等々。

称名が終わると聖ラーマクリシュナは、手を合わせて大実母を瞑想しておられる。二、三人の信者が、夕方から庭園やガンジスの岸辺を散策していたが、献灯の後まもなく、大覚者様の部屋へ次々と集まっ

（訳註）ドルヴァ——ヒンドゥー神話に出てくる聖者で、「固定したもの、動かないもの」の意があり、天空において動くことのない北極星を神格化している。ブラフラーダー——プラーナ中にてくるヴィシュヌ派の偉大な信仰者。

少年のとき、父である魔王ヒラニヤカシブに苦しめられた。主はライオンに化身して現れ、父親を滅した）

てきた。大覚者様は寝台に坐っていらっしやる。校長、アダル、キシヨリーたちが寝台のすぐ下の正面に坐っている。

聖ラーマクリシユナは一同に向かつて――

「ナレンドラ、バヴァナート、ラカール、この子たちはみんな、永遠成就者だ。神の分身だよ。学問や修行は、いわば余分なものだ。見てごらん、ナレンドラは誰のことも気に留めない。わたしといっしょにキャプテンの馬車に乗っていたとき、キャプテンがいい席に坐るように言つたが、ぜんぜん見向きもしない。わたしにさえ、一向に頼る気はないんだよ！ 知つてゐることもあんまり言わない――わたしがいろんな人に、『ナレンドラはこんなに賢いんだよ』と言いふらすと困るから――。妄想も、執着も、全くない。何にも縛られていないようにだ！ まつたく、上等な器量だよ。それに、いい性質が沢山あるし――歌うのも、楽器を弾くのも、書くのも、読むのも、何でも上手だ！ そのうえ性欲まで支配できるから――結婚はしないと云つてゐるよ。ナレンドラとバヴァナートはおそろしく仲が良くてね――まるで、男女一対みたいだ。ナレンドラはあんまりしげしげと此処に來ないがね。それがいいんだ。あんまり來ると、わたしの方が圧倒されてしまうからね」